

小中一貫教育推進、教育行政の持続可能性向上の観点から見た望ましい施設形態とは

望ましい施設形態



【施設一体型】
同じ施設内で運営している

発言委員数

10人

そう考える理由

■児童生徒の学びの質向上

- 児童生徒に豊かな（人間性・社会性を育む）生活の場を提供できる。
- 人間力・社会力を向上させる隠れたカリキュラムである異年齢集団での生活の良さを発揮できる。
- 常に多世代・多様な姿を感じることができる。
- 異年齢交流が安易にでき、児童生徒が児童生徒の中で交流しながら、互いに共感する場・時間の中で育つことができる。
- 児童生徒が、日常的に共に生活しやすい。（小学校高学年のリーダーシップの課題は、行内活動のグルーピングの工夫で解消できる。）
- 児童生徒の交流が深まり、児童生徒の優しさ、考える力の向上が期待できる。
- 上下関係を含め、日常的に異年齢の交流ができる環境が作れる。
- お互いの交流、乗り入れ授業や共同行事などの頻度が上がり効果が高まる。
- 9年間の学校生活等に一体感が生まれ、中一ギャップの解消につながるなど「安心感」が得られる。
- 小中学校の先生方の共有により、中学生になっても知っている先生がおり、児童生徒の安心につながる。
- 日常的に、児童生徒、教師、地域の皆さんと「顔が見える」関係性を構築できる。

■学校運営のしやすさ

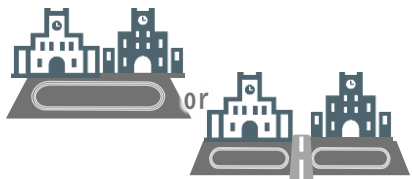
- 先生や校長先生が同じ空間にすることで考え方や教育方針等が統一される。
- 教員にとっても、小中の教職員がともに勤務することで、広い視野で授業づくりに臨める。
- 教科担任制など質の高い教育環境を、児童生徒に提供できる。
- 中学校の専科の先生など、小中学校の先生方の共有が容易になることで、学びの質が高まる。
- 教職員の会議や研修が実施しやすく、一貫教育の強みを生かしていける。
- 教職員同士が協力し合える環境ができ、組織的な対応が可能になる。
- 管理職等のマネジメントがしやすい。
- 児童生徒一人一人の良さや成長を、日常生活の中でみとることができる。
- 発達段階に合わせて工夫しながら人間関係の構築ができる。
- 学園行事やイベントが実施しやすくなる。
- みらい創造科による探究する学びなど、9年間の学びの体系が可視化されることで、進めやすくなる。

■限られた資源を集中投下できる

- 教員(人材)の共有が極めて容易にできる。
- 教員資源をフレキシブルに活用できる。
- 教職員の乗り入れ授業が柔軟に行える（移動時間がない）。
- 教員の行き来が安易となり、一貫教育の深まりを生むことができる。
- 地域の力を集約できる。
- より多くの地域の皆さんの関与が可能になる。
- 地域の中で、小中学生と共に過ごす機会が少なくなっており、日常的に総合に姿を見ることができる小中合同学習や合同行事などが頻繁にできるようになる。
- 小中学校で別々に出てくる情報が一元化され、地域と先生方の情報共有が容易になることで、スピード感を持った児童生徒支援が可能になる。
- 児童生徒の学びの環境として、より良い環境整備に向けた投資を集中的に行うことができる。
- 今ある中学校施設を有効に活用でき、教育行政の持続可能性が高まる。

小中一貫教育推進、教育行政の持続可能性向上の観点から見た望ましい施設形態とは

望ましい施設形態



【施設隣接型】

同じ敷地内 または 隣接している
施設でそれぞれ運営している

発言委員数

2人

2人とも「施設一体型が望ましい」とした上での選択

そう考える理由

- 年齢で成長の度合いが違う、男女のコミュニケーションの違い、個と個の距離感の違い、先輩後輩・上下関係の区切りの必要から、小学生と中学生の日常の居場所分けた方が良い。
- 施設一体型が望ましいが、施設に要する資金等で一体型ができない場合は、一体型に近く持続可能な隣接型も選択肢に入れるべき。
- 広大な土地の確保が難しい場合など、一体型にしたいができない場合、隣接型が望ましい。

小中一貫教育推進、教育行政の持続可能性向上の観点から見た望ましい施設形態とは

望ましい施設形態



【施設分離型】

それぞれ別の場所で運営している

そう考える理由

発言委員数

0人